書評　山下英一著『グリフィス福井書簡 -Griffis' Fukui Letters-』

高木不二

本書はグリフィス書簡の翻訳という体裁をとっているが、その内容はグリフィス研究の第一人者による、研究の集大成ともいうべき労作である。

構成は以下のとおりである。

Introduction
まえがき
Ⅰ　『福井書簡』解説―出版にあたって
Ⅱ　The Fukui Letters
Ⅲ　福井書簡
Ⅳ　私のグリフィス研究史
　―文学作家の面影を追う―
あとがき

基本的にはグリフィスが福井に着任した一八七一（明治四）年三月九日から、福井を去る一八七二（明治5）年一月二二日までの英文書簡の原文（Ⅱにあたる）と、その翻訳（Ⅲにあたる）であるが、Ⅰには『福井書簡』を読むうえで必要な史料解題と、グリフィスの略歴が描かれ、Ⅳでは著者の新たなグリフィス論が展開されている。

すでに著者は『グリフィスと福井』『グリフィスと日本』を著し、『明治日本体験記』『グリフィス先生越前豆日記』の翻訳という翻訳を中心とした本も上梓している。しかしその後も、グリフィスはもとより、その周辺の人物や文化的背景の調査を粘り強くつづけられ、本書にその成果が盛り込まれている。手書きの原文を解読することだけでも大変な労力を必要とするが、本書のようなかたちでこれまでの研究をまとめられたことは、まさに敬服に値する。

そのすべてを理解・指摘する力量は評者（高木）にはないが、可能な範囲でいくつかを指摘しつつ、本書の意義を紹介し、読者の理解に供しようと思う。

まず注目されるのが、グリフィスが福井にきた目的が明確にのべられていることである。一八七一年五月二八日付けの姉マギーあての手紙には、「新しい通訳には『新しい考案』をじゅうぶんに托せられると思う。即ち、フクイ・カレッジを日本一にする、化学の国定教科書を作る、女子教育を勧める、飲酒・混浴の廃止など」と述べられている。グリフィスは藩校での科学教育にとどまらず、日本の文明化への発信地として福井を位置づけ、みずからの献身の場とする意向を持っていたのである。

次にこの書簡史料が有益なのは、グリフィスの福井における交友関係が具体的にわかることである。例えば福井藩の経済政策を推し進めた中心的人物として知られる三岡八郎（由利公正）の場合である。わたしはかつて、グリフィスが帰国後しばらくたって福井に書き送った書面をグリフィス・コレクションでみたことがある。そのときの印象では、グリフィスと三岡のあいだには、あまり直接的な交流があったようには感じ取れなかった。しかし書簡集をみると、一八七一年四月二八日の姉マギーにあてたものには、「三岡さんの家でその妻、子供、友人と楽しい夜を過ごし

た。ぼくは三岡さんの若い息子をジョーンズと名づけて呼ぶ」と記され、同様に九月一七日の手紙には「三岡さんは江戸へ発った。その家にはぼくはよく行って自由に話していたが、藩主の地位に匹敵する東京知事に任命された」と書かれている。両者には公的なつながりのみならず、私的な交流もあったことがわかり、わたしの過去の印象が誤ったものであることを知った。

また、これも個人的な関心から述べるのだが、熊本藩の沼川三郎（横井大平）についても新しい事実を知ることができた。沼川は幕末に福井藩に招かれて三岡とともに藩政改革を推進した儒学者横井小楠の実兄の子で、ラトガース・グラマースクールでグリフィスから英語を習った教え子にあたる。グリフィスが来日する前にすでに彼は病を得て帰国していたが、五月二三日づけの書簡によれば、その沼川が三人の学生を福井に送ってきたのである。熊本と福井の関係に興味のある研究者や、私のように横井ファミリーに関心のあるものにとっては、重要な新事実をここで知りえたことになる。

その他、書簡集を丁寧に読めば、それぞれの関心にしたがって、福井の人物についてはもちろん、勝海舟、ルセー、フルベッキなどの藩外の人物についても貴重な事実を知ることができよう。

三つめに指摘できるのは、書簡を追うことによって、福井におけるグリフィスの心情の揺れや変化が読みとれることである。

五月一二日マギーあて書簡には、「ぼくがこのような世界の果ての絶望的状態に居ながら、甘んじて家の人たちのこともほとんど気にせず、異郷の生活に満足していると思われはしないか心配だ」と書き、「異郷」暮らしを嘆きながら、九月九日には「時にホームシックにかかる、悲嘆にくれる、落胆することがあっても強い決意で日本の仕事を立派にどこまでもやりぬき、日本の将来に消すことができない足跡を残すように努めたい」と日本への貢献を決意する。こうした書簡ならではの真情の吐露が、読むものにとってはある意味で心地よい。グリフィスが身近に感じ取れる瞬間である。

その他、枚挙にいとまないほどの新事実をこの書簡集から読み取ることができるが、最後にグリフィスが福井を去るにいたるまでの経緯を紹介したい。契約一年がせまった三・四ヶ月前グリフィスは文部省にあてて各地に工芸または科学学校を設置するよう要望書を書き送った。これに対し、文部省からグリフィスを江戸にもどすよう福井藩に命令が下った。フルベッキもこの計画をバックアップし、江戸の工芸学校で理化学教授の職があるから上京するよう勧めた。グリフィスは乗り気であったが、村田参事はじめ福井の役人は強く抵抗した。長いタフな交渉の結果、ついにグリフィスは「勝った」。孤独から解放されて、これから「快適なキリスト教社会のなかに入っていくと思っただけであまりにうれしく、うっとりする」とグリフィスは述べている。当時のグリフィス、文部省、フルベッキそして福井藩の動きが手に取るようにわかる貴重な証言である。

本書は訳文もわかりやすく練られており、その訳文や注記には著者の長年にわたる研究の成果が生かされており、きわめて示唆に富むものとなっている。また、本書には私の知

らないグリフィス関係の貴重な写真もたくさん含まれていて参考になる。これもまた著者の長年にわたる研究の成果といえよう。

私も二〇〇一年から二〇〇二年まで約一年間ラトガース大学に留学し、グリフィス・コレクションを調査した経験をもつが、本書に注がれた著者の蘊蓄のどれほどを汲み取りえたかは、はなはだ心もとない。ご海容を乞う次第である。

最後になったが、ここであつかわれた「グリフィス書簡」は、ラトガース大学アレクザンダー図書館のグリフィス・コレクションにそもそも収められているものなのか、そうであればその配架状況はどうなのか、またそのコピーは国内で閲覧できるのか、東京に移ってからの書簡はまとまったかたちで残されているのかなど、後続の研究者として著者にうかがいたいことはつきない。著者山下さんの今後のご健勝をお祈りするとともに、末長いご教示をお願いして筆をおくことにする。

（二〇〇九年六月二一日　能登印刷出版部発行）